

現代日本語における「地味に」の新用法

—様態副詞から程度副詞・叙法副詞へ—

永澤 濟

要 旨

文化庁の言語使用調査等でも指摘されているように、副詞「地味に」は近年、「地味に痛い」「地味に一番重要だ」「地味に全部消えている」等、新用法を派生させ、使用が拡大している。それら新用法の新しさとはどこにあるのか、コーパスの用例を歴史的に考察した結果、次の結論を得た。「地味に」の従来用法は専ら【様態副詞】であったのに対し、新用法はそれが【程度副詞】【叙法副詞】へと派生したものである。【様態副詞】が〈様態〉を表すと同時に〈程度〉をも表すケースを媒介として【程度副詞】が出現したとみられる。さらに、【程度副詞】において〈程度性〉の意味が後退し、〈表れ方が表立っていない〉ことを主眼とする用例が出現したことを発端に【叙法副詞】が成立したとみられる。【叙法副詞】が自己主張を和らげる控え目な表現としての機能をもったことが、使用範囲を拡大させたとみられる。様態副詞から叙法副詞への変化は日英語の副詞にも起きており、一般性のある変化傾向である。

キーワード

副詞変化の傾向、様態副詞、程度副詞、叙法副詞、文副詞、日英語

1. 問題の所在

本稿では、次のような副詞「地味に」の新用法に着目する。文化庁「令和2年度国語に関する世論調査」（2021年公開）では、〈騒ぐほどではないが確かに〉の意味で（1）のような用法を「使うことがある」とした人は全体で39.8%、年代別では30代以下で80%を超え、社会的に使用が広がっている¹。

- (1) 地味に痛い。〔文化庁「令和2年度国語に関する世論調査」／2021年〕
- (2) 院内は清潔か…これは地味に一番重要です。〔BCCWJ² Yahoo! 知恵袋／2005年〕
- (3) パソコンさん退院して帰ってきたら地味に顔文字が全部消えているじゃありませんかッッ〔NWJC³〕
- (4) モノログや台詞まわしがいい、地味にすごく好きな話かも〔NWJC〕

「地味」は国語辞典に「1. 形や模様などにはなやかさがなく、目立たないこと」「2. 性質や物の考え方・生活態度などが、飾りがなくて控え目なこと」（デジタル大辞林）と記述されているように、本来は〈目立たない、控え目〉の意を表す。しかし、(2)－(4)では最上級を表す「一番（重要）」、「全部（消えている）」、「すごく（好き）」などの強調表現と共起し、〈控え目〉の意を表してはいない。すなわちこれらの用例は「地味に」が本来とは異なる意をもつに至ったことを示している。後述のように、専ら様態副詞であったところから、新たに程度副詞⁴および叙法副詞⁵の用法を派生させたとみられる。

以下では、コーパスを用いて「地味に」の用法の時期的な変遷を示し、上のような新用法が、従来の用法に対してどのような点で新しいのかを言語学的に分析する。また、日英語の副詞一般に同様の変化がみられることを論じる。

2. 近代までの「地味に」

2. 1 前近代の例

まず、『日本国語大辞典』第二版（以下『日国』）と国立国語研究所『日本語歴史コーパス』（CHJ）を調べると、前近代には「地味に」の副詞用法はみられない。次のような形容動詞「地味な」の例はみつかる。『日国』における初出は16世紀後半の例（5）（6）で、〈性格や様子などが、目立たなく落ち着いていること〉とされる。また、CHJにおける初出は江戸期

の例(7)で、同コーパス中で前近代の語彙素「地味」の例はこれが唯一である。これらの例は、意味的にみて、次節以下に示す副詞用法に直結するものと考えられる。

- (5) もみぢや風流な花などは、一旦のもてあそび物なり。ぢみなことは、野菜のな、大根のつれがちよほう也〔詩学大成抄・六卷／1558-1570年頃〕
- (6) 人のまことにぢみなことを云たかなにを云たやら〔玉塵抄・一六卷／1563年〕
- (7) 身は初雁よ初霜に寝乱れ姿忍ばしと、前垂れ取つて丸ぐけの、櫛を地味な抱へ帯しやんと結んで引き締めて歩むとすれど行き馴れぬ道はかどらぬ女旅〔CHJ 長町女腹切（近松門左衛門）／1712年〕

2. 2 明治・大正期の例：様態副詞用法

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』（CHJ）により、明治・大正期の語彙素「地味」を調べると、『日国』の〈性格や様子などが、目立たなく落ち着いている〉にあたる用例（全用例から〈土地に生じて食物となるもの〉〈地質のよしあし〉の用例を除いたもの）は51例ある。この中に「地味に」の形の副詞用法は次のとおり5例ある⁶。

- (8) 苦沙彌君杯は道樂はせず服装にも構はず、地味に世帯向きに出来上つた人でさあ〔CHJ 吾輩は猫である（夏目漱石）／1907年〕
- (9) 私は滔々たる時流に頓着なく、地味に徐々に進んで行かうと思ふ。〔CHJ 太陽「美術院日本畫作家の感想」（筆谷等観）／1925年〕
- (10) あでやかに青年を見返りながら、小指を何んとも云へない好い形に折り曲げた左手で、鬢の後れ毛をかき撫でる序に、地味に装つて来た黒のリボンに觸つて見た。〔CHJ 或る女（有島武郎）／1919年〕
- (11) 現に獨逸の如きは英米に比しては地味にやつてはゐるが、而も其

成績は更に一頭地を抜いてゐるではないか。〔CHJ 太陽「將來の空中戦」(岩本周平) / 1925年〕

- (12) 現在の農村は實に悲惨なものであります、極くぢみに暮して間がよくて手一杯です、〔CHJ 太陽「産兒制限を求むる人々」(加治時次郎) / 1925年〕

いずれも、「地味に」は動詞「出来上がる」「進んで行く」「装って来る」「やって(は)いる」「暮らす」を修飾しており、様態副詞(ここでは(8)のように結果的な意味を表すケースも含む⁷⁾)として機能している。

2. 3 昭和初期(戦前)の例：様態副詞用法

同様に、国立国語研究所『昭和・平成書き言葉コーパス』(SHC)⁸⁾により、昭和初期(戦前)の「地味に」の副詞用法を調べると次のとおり4例ある。⁹⁾

- (13) それは、苦勞と、心のはげしい生活と、鋭い成長とのために、四つ五つも、地味に、老けてしまつたが〔SHC 中央公論「新しい夜」 / 1933年〕
- (14) 母と二人きりで、大森の或坂の上にある、元銀行家だつた父の遺して行つた古い屋敷に地味に暮らしてみた。〔SHJ 中央公論「菜穂子」 / 1941年〕
- (15) 彼らはこれを象徴化して、讃歌的に歌ふといふよりも、漸く、眼前の小さな部面を据へて、地味に、そして、ひそやかに詩形を通じて記録することが、彼等にとって、最高の詩的行爲であつた〔SHJ 中央公論「日獨戦争詩について」 / 1941年〕
- (16) 公共的な事に奉仕する場合でも成るべく目立たぬやうに地味に地味にと心掛ける人である。〔SHJ 中央公論「本朝畫人傳 川合玉堂」 1941年〕

この時期も、「地味に」は動詞「老けて」「暮らしている」「記録する」「奉仕する」を修飾しており、いずれも様態副詞として機能している。

以上のように、近代（～1945年）までの副詞「地味に」の用例はいずれも様態副詞である。

3. 現代の「地味に」

3. 1 昭和期（戦後）の例：様態副詞用法の中に程度性をもつ用例の出現

さらに時代を下って、国立国語研究所『昭和・平成書き言葉コーパス』（SHC）により、昭和期（戦後）の「地味に」の副詞用法を調べると次のとおり10例ある。

- (17) しかもアメリカでは右のような調査はマッカーシーなどの演じた茶番劇の舞台裏で、地味に「科学的」にも進められているのである。
〔SHJ 中央公論「知識人の共通の敵」1957年〕
- (18) 県労協を中心とする各労組は、この十年間無キズのまま地味にその組織力をつよめ、下部から組合員の意識を高めて来ている。
〔SHJ 中央公論「国鉄新潟闘争・現地の声をきく」1957年〕
- (19) 「當分ジミに行こう。氣をつけてくれ。」その平板の服装もジミなグレイの背廣の、身がまえ堅く、〔SHJ 中央公論「白頭吟」1957年〕
- (20) メロディヤスなところが少く、語りものの感じが強いが、この点を巧みに利用し、またブラッサンスの風格を生かして、つとめてじみに使いこなし、歌をおさえ、これを単に画面の構成要素として生かすように工夫している。〔SHJ 中央公論「淡い感傷と人情味『リラの門』」1957年〕
- (21) 「貴族階級」が、東方にはめずらしく、おごりや飾りけなく暮している。しかし町の大部分は小市長たちによつて地味に住まわれている。〔SHJ 中央公論「中東における冷い戦争」1957年〕

- (22) 産経は“遠洋漁船団で集団殺人の怪情報、不良船員の悪質デマか”と一段記事で地味に扱い、記事の内容も否定的。毎日是一般記事にしないで社会面の“雑記帳”欄でとりあげ、〔SHJ 文春「新聞エンマ帖」1965年〕
- (23) その意味で地味に扱った毎日、産経の両紙と、記事にしなかった朝日の良識を買いたい。〔SHJ 文春「新聞エンマ帖」1965年〕
- (24) 半日おくれの夕刊で、「韓国の戒厳令は非合憲」の見出しで、ちゃんとやっている。ただし、地味に。〔SHJ 文春「新聞エンマ帖」1973年〕
- (25) 東京だけが同じニュースを「日産、VW と提携 まず小型車 (VW) 日本で生産」と、一面四段見出しで地味に扱っていたのは、解せない。〔SHJ 文春「新聞エンマ帖」1981年〕
- (26) 後ろから蹴りかかる男にも、デイヴィッドは同様の仕打ちをした。デイヴィッド以外の人々はもっと地味に闘っていた。殴り合いというよりは、押し倒し合い踏みにじり合いといった風情で、〔SHJ 文春「わが美しのボイズンヴ…」1989年〕

この時期も引き続き、「地味に」は動詞「進められている」「つよめ」「行こう」「使いこなし」「住まわれている」「扱い(扱った、扱っていた)」「やっている」「闘っていた」を修飾しており、様態副詞として機能している。

ただし注目されるのは、その中に、戦前までのコーパスにはみられない、〈程度性〉を示すタイプの用例が出現していることである。すなわち、〈様態〉を示しつつ、それが〈程度〉をも表している用例である。次の2つの例を比較してみよう。

- (27) 「貴族階級」が、東方にはめずらしく、おごりや飾りけなく暮している。しかし町の大部分は小市長たちによつて地味に住まわれている。〔SHJ 中央公論「中東における冷い戦争」1957年〕〔再掲=(21)〕

- (28) 産経は“遠洋漁船団で集団殺人の怪情報、不良船員の悪質デマか”と一段記事で地味に扱い、記事の内容も否定的。毎日是一般記事にしないで社会面の“雑記帳”欄でとりあげ、[SHJ 文春「新聞エンマ帖」1965年] [再掲 = (22)]

(27) では、その町での小市長たちの暮らしぶりが質素で飾り気がないことを「地味に（住まわれている）」と表現している。純粹に〈様態〉（暮らしぶり）を表しており、〈程度性〉はみえない。一方、(28) では、記事としての扱い方が小規模（一段記事）であることを「地味に（扱い）」と表現している。そこでは、扱い方の〈様態〉を述べることに同時にその規模（= 〈程度〉）の大小を表すことにもなっている。つまり〈様態〉を示しつつ〈程度〉をも示している。同様の〈程度性〉は、(26) の「地味に（闘っていた）」にも認められる。そこでは闘い方の〈様態〉を述べると同時に、「殴り合い」と「押し倒し合い踏みにじり合い」との対比を通して、闘い方の激しさ（= 〈程度〉）の大小を述べることにもなっている。

以上のように、昭和期（戦後）のコーパスにみられる「地味に」の様態副詞用法の中には、〈様態〉を表すことが同時に、規模や激しさなどの〈程度〉をも表すタイプの用例が出現している。このタイプの出現が、以下にみる現代の新用法を生む端緒とみることができる。

3. 2 昭和・平成期（1976～2009年）の例：程度副詞・叙法副詞用法の出現

最も新しい時期の用例として、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）により昭和・平成期（1976～2009年）の「地味に」の副詞用法を調べると81例ある。

3. 2. 1 様態副詞用法

そのうち、様態副詞用法として次のような用例がある。

- (29) 多くの法律専門家がこの判決を読んで、上級審にいてもゆるぎそうにない判決であると評価したのは、あくまで地味に手堅くまとめられ、ズサンな部分がないからである。〔BCCWJ ロッキード裁判とその時代／1994年〕
- (30) このワイアット夫妻や田中さんのように人知れず、現地に住んで地味に、息長く活動をしている人たちがいる。〔BCCWJ 平和な国の医者だけど／1996年〕
- (31) 髪はロングのストレート（束ねるなら三つ編みなど、地味に）で色は黒。こげ茶色はギリギリセーフ、他の色は問題外です。出来ればメガネはしないほうが良い。イヤリング・ピアスもダメ。化粧も極力薄めで派手な口紅も良くない。〔BCCWJ Yahoo! 知恵袋／2005年〕
- (32) 雨の日も風の日も二日酔いの日さえも休まず、日々真面目に働き、連れ添いに頭が上がりず堅実で地味に生きることしか脳がない私の数少ない楽しみの一つ、それはお酒だ。〔BCCWJ Yahoo! ブログ／2008年〕
- (33) myu は GW を控えて地味に過ごす予定 〔BCCWJ Yahoo! ブログ／2008年〕

(29) - (33) の「地味に」はいずれも様態副詞で、動詞「まとめられ」「活動をしている」「束ねる」「生きる」「過ごす」を修飾し、そのありさまが派手ではなく〈目立たなく落ち着いている〉様子を表している。上の (27) と同タイプで、純粹に〈様態〉を表しており、〈程度性〉はみえない。

一方、次のように、(28) と同様の様態副詞で、〈様態〉を表すことが同時に〈程度〉をも表す用例もみられる。

- (34) 次は、嵌入れ式、つまり着工式をいつ行うかだ。服喪期間でもあり、自粛して 地味にやるべきだという意見も多かったが、他方で陰鬱な雰囲気振り払うために景気直しに、ワットと賑やかにやるべ

- きだという意見もあった。〔BCCWJ 文藝春秋「蒲田戦記」／2003年〕
- (35) 僕は諦め顔で水を撒く。命じられたとおりに水を撒く。柄杓で地味に、しかし丹念に水を撒く。店の周辺、すべてに水を撒く。〔BCCWJ 惜春（花村萬月）』／2003年〕
- (36) 着る人のセンスの有無をくっきり浮き彫りにするのが色選び。無難な黒や白、悪目立ちな派手色、“いい人”に見えるパステルカラー実はそのどれもがベストチョイスとはいえません。「いい男」最善の選択は、地味に目立つ「差し色ハイゲージ」です。基本の基で買いたいのは極上素材の浅Vグリーン〔BCCWJ Men's Ex／2004年〕
- (37) ちなみに昨日話した件も今日で終息したので、ブログは元通りのついでに地味に変化させたと補足させていただきます〔BCCWJ Yahoo! ブログ／2008年〕
- (38) 清原の引退が大きく報じられてる中、小さく、小さく地味に…〔楽天・吉岡ら戦力外〕 ああ… そりゃあ、いつか… こんな日は来るのはわかってけど… また、ひとり好きな野球選手が消える。〔BCCWJ Yahoo! ブログ／2008年〕
- (39) 次に仲間になるであろうディスガイアのエトナとプリニーは、とりあえず敵サイドとして登場したので少しは楽しませてくれるのかな？まあ、プリニー初戦地味に苦戦しましたしね～〔BCCWJ Yahoo! ブログ／2008年〕
- (40) 地味に回復効果もアップ〔BCCWJ Yahoo! ブログ／2008年〕

(34) では、着工式の〈様態〉を派手にしないことを述べているが、そのことはすなわち規模(=〈程度〉)が小規模であることをも意味している。(35) では、柄杓を用いて水を撒く行為の〈様態〉が目立たないものであることを述べているが、同時に、撒く水量の〈程度〉が柄杓で撒けるほどの少量であることをも含んでいるとみられる。(36) では、グリーンの服を着ることで派手ではなく落ち着いたある目立ち方することを述べており、目立ち方の〈様態〉を表すことが同時にその〈程度〉を表すことになっ

ている。(37)－(40)でも、それぞれ「変化」「報道」「苦戦」「アップ」の〈様態〉を表すことがそのまま〈程度〉の小ささを表すことになっている。

このように、昭和・平成期（1976～2009年）においても、前節3.1に示した昭和期（戦後）に引き続き、〈様態〉を示しつつ〈程度〉をも示す様態副詞の用例がみられる。

3. 2. 2 程度副詞用法の出現

さて、この昭和・平成期（1976～2009年）には、それ以前にみられなかった程度副詞用法の用例が出現している。形容詞を修飾する次のような例である。

- (41) 送料着払いで送るとシールが貫えないということですが、皆さんご存知でしたか？私はさっき初めて知りました。節約生活が常な私にとっては地味にシヨツクでした… [BCCWJ Yahoo! ブログ／2005年]
- (42) 擦りむいただけだから地味に痛い。なんだろう皮膚の表面だけ剥けた感じ？こんなの嫌だ！ [BCCWJ Yahoo! ブログ／2008年]
- (43) 今はその辺の雑魚（…といっても地味に強いのですが）と戦いつつ、強化に必要な EP やら溜めて武器防具アクセ強化って感じですよ。 [BCCWJ Yahoo! ブログ／2008年]
- (44) 先週は地味に忙しく、なのに風邪などひき、すっかりテヌキの日々だった。 [BCCWJ Yahoo! ブログ／2008年]
- (45) 日曜日はデフォでゲーセン行ってた日々が懐かしい。 [中略] ストIVも地味に楽しいんで人がいる方をやるぐらいの軽い気持ちです。 [BCCWJ Yahoo! ブログ／2008年]
- (46) いや～地味に難しかった エイトビートがなんとかって言ったな 奥が深いね！ [BCCWJ Yahoo! ブログ／2008年]
- (47) クロナの髪って地味にバラバラだよ。 [BCCWJ Yahoo! ブログ／2008年]

- (48) すきなゲームは？ぶよぶよが地味に得意です、笑 [BCCWJ Yahoo! ブログ/2008年]
- (49) 地味に好きシリーズㄗㄗ芸人ブログ：斉藤工ㄗ芸人：超新熟ㄗ電化製品：エアコン [BCCWJ Yahoo! ブログ/2008年]
- (50) 適当に考えた式を数値変えながらちまちま調整するのは後回しで、大体動くようにするのが先と。なんだコレ地味にハードル高いな。 [BCCWJ Yahoo! ブログ/2008年]
- (51) さすがにちょっと油断が祟ったのかまたも帰りが遅くなってしまいました。地味にバス代二百円の出費が痛い… [BCCWJ Yahoo! ブログ/2008年]

(41) - (51) に示した2005年・2008年の例では、それぞれ「ショックだ」「痛い」「強い」「忙しい」「楽しい」「難しい」「ばらばらだ」「得意だ」「好きだ」「高い」という形容（動）詞を「地味に」が修飾している。前節までにみたように、様態副詞用法が純粹に〈様態〉を表すばかりでなく〈程度〉（の小ささ）をも表すに至った結果¹⁰、このように形容詞をも修飾できるようになったとみられる。ここに、新たに程度副詞用法が出現した¹¹。

ここで「地味に」が表しているのは〈程度が目立っては大きくない〉こと、および〈(程度が大きくないが故に) 表れ方が表立っていない〉ことである。(41) では、特典のシールがもらえないことにショックを感じてはいるものの、ショックの程度は目立っては大きくなく、さほど表立ってもいないことを「地味に」によって述べている。同じく (42) でも、「擦りむいただけだから」とあるように、痛みの程度は大きくなく、表立ってもいない。(43) - (51) も同様に説明できる。

それら程度副詞用法の中には、次の(52)「地味にきれいです」のように、きれいさを十分に認めたくえで（文脈からみて〈程度が目立っては大きくない〉ことを述べる意図は小さいと思われる）、そのきれいさの〈表れ方が表立っていない〉ことの方に表現の主眼が置かれているとみられる用例がある。

(52) ほとんどのクレマチスが休眠中ですが、シルホサは少しですが咲いています。地味にきれいです。〔BCCWJ Yahoo! ブログ／2008年〕

このように、〈程度が目立っては大きくない〉の意味が後退し、〈表れ方が表立っていない〉ことの方に表現の主眼が置かれたタイプが、次節にみる叙法副詞用法につながったと考えられる。

3. 2. 3 叙法副詞用法の出現

昭和・平成期（1976～2009年）には、前節の程度副詞用法と同様、それ以前にはみられなかった叙法副詞用法の用例も出現している。叙法副詞とは、工藤（1982, 2000）において「推量、依頼といった、文の語り方＝叙法性（modality）に関係する」と定義されているもので¹²、「地味に」の以下のような用例がこれに該当する。

まず、次の「地味に」は（53）では「長期休養明け」、（54）では「アルカリ性」という名詞述語を修飾している。このことは、動詞を修飾する様態副詞とも、形容（動）詞を修飾する程度副詞とも異なるタイプの出現を意味しており、これを叙法副詞とみることができる。

(53) アドマイヤタイトルは地味に長期休養明けなのに4着。これは次、OP 廻りに出たら注目かな。〔BCCWJ Yahoo! ブログ／2008年〕

(54) お野菜って地味にアルカリ性だったりするのね…〔NWJC〕

（53）で注目されるのは、「地味に」が修飾する名詞「長期休養明け」は、「非常に長期休養明けだ」などとは言えず、程度性の意味を全くもたないことである（一方、たとえば「問題」という名詞は「この状況は非常に問題だ」のように言え、程度性を持ち得る）。よって、ここでの「地味に」は〈程度〉を表してはいない。かつ、動詞を修飾してもないことから、行為や変化の〈様態〉を表しているわけでもない。ここで表されているのは、レースに臨む競走馬が「長期休養明け」という不利な状況にあったという事実

の〈表れ方が表立っていない〉ことであろう。同様に(54)では、野菜が「アルカリ性」であるという事実の〈表れ方が表立っていない〉ことを述べている（「アルカリ性」は高低の程度性をもつ名詞だがこの文脈では程度は問題にされていない）。つまり「地味に」は、「(馬が)長期休養明け」「(野菜が)アルカリ性」といった叙述内容に対し、情報を付加（様態や程度を限定）しているのではなく、その事実が目立たず認識されにくいものとして提示する（叙法の）はたらきをしている。

すなわち(53)(54)は、前節(52)と連続的なタイプであり、〈程度性〉が後退し、〈表れ方が表立っていない〉ことに主眼が置かれている。そこで「地味に」は、当該の状況や事実に対する〈話者の捉え方〉(述べ方)を表している。ここに、様態副詞でもなく、程度副詞でもない、叙法副詞用法が出現したとみることができる。

次の用例も同じタイプである。

- (55) 院内は清潔か…これは地味に一番重要です。〔BCCWJ Yahoo! 知恵袋/2005年〕〔再掲 = (2)〕

(55)では、形容動詞「重要だ」に最上級を表す「一番」が付されている。このことから、「地味に」は〈程度〉の小ささを表してはいない。すなわち程度副詞ではない。ここでも叙法副詞として、〈表れ方が表立っていない〉ために認識されにくいものとして提示しつつ、実は「一番重要」であるということを述べているとみられる。同様の例は国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(NWJC)にも多く見出せる。

- (56) 最後の方のアクションは地味にすごくカッコイイ〔NWJC〕
 (57) 腹筋中心とした、ワークアウトなんです、地味にかなりきついです〔NWJC〕
 (58) パソコンさん退院して帰ってきたら地味に顔文字が全部消えているじゃありませんかッッ〔NWJC〕〔再掲 = (3)〕

(59) 学生に月1万5000円って地味にキツイ出費なんだけどな…〔NWJC〕

(56)–(59)では「イチバン(嬉しかった)」「すごく(カッコイイ)」「かなり(きつい)」「全部(消えている)」「キツイ(出費)」のような強調の表現と「地味に」が共起していることから、やはり〈程度〉の小ささを表してはいない。叙法副詞として〈表れ方が表立っていない〉ことを述べているとみられる。

この〈表れ方が表立っていない〉ことを話者の見方として述べる叙法副詞用法は、次のように、話者が自身の感情や見方、提案、自己の側にある情報などを提示する場面で、自己主張を和らげ、控え目に述べる機能をもつと考えられる。

(60) 「相棒」元日 SP をリアルタイムで最後まで見られたのが、地味にイチバン嬉しかったかも〔NWJC〕

(61) モノログや台詞まわしがいい、地味にすごく好きな話かも〔NWJC〕〔再掲＝(4)〕

(62) 地味におすすめできるマンガです〔NWJC〕

(63) ブログペット地味にうちにも居るからヨロシク〔NWJC〕

(64) 当ブログも、地味に6/9で3周年となりました〔NWJC〕

(65) 私、地味に彼の映画とか観た事なかったんですけど〔NWJC〕

(60) (61)では、上掲(55) (56)と同様に、強調表現「イチバン」「すごく」と共起している。強調表現により「嬉しい」「好きだ」という感情が最高レベルにあることを表明する一方で、「地味に」を付加することで〈表れ方が表立っていない〉という述べ方をしている。そこには、感情のストレートな表出を回避し、控え目に表現したいという話者の心理がみとれる。推量を表す「かも」を文末において表現を和らげているのも、同方向の心理とみられる。(62)は、「おすすめ」を述べる文脈で、その「マンガ」は話者にとって好ましいものであるわけだが、「地味に」を付加することで

控え目に表現し、自身の嗜好に他者を引き込むことの押し付けがましさを回避している。(63)は、「ブログペット」の存在の〈表れ方が表立っていない〉という述べ方をすることで、身内ともいべきペットの存在を控え目に表現し得ている。(64)も、自身の「ブログ」が記念日を迎えたことについて、「地味に」の付加により、わたくしごとを控え目に表現しているとみられる。(65)は、「彼の映画を観たことがない」という自身の経験について、〈表れ方が表立っていない〉という述べ方をすることで、とりたてて述べるほどのことでもないとの態度を示しているとみられる。

このように「地味に」は、〈表れ方が表立っていない〉ことを述べる叙法副詞用法を獲得し、それは自己主張を和らげる控え目な表現としての機能をもつに至った。その結果、冒頭第1節で紹介したように、若い世代を中心に社会的に使用が広がったと推定される。

3. 3 本節のまとめ

以上、昭和期（戦後）以降の現代の「地味に」の副詞用法の展開を考察した。コーパスの用例を追った結果、戦前は専ら純粹な【様態副詞用法】であったが、戦後になって、様態副詞用法の中に程度性をもつ用例の出現を確認した。すなわち、様態副詞が〈様態〉を表すと同時に〈程度〉をも表す用例である。このタイプを媒介に、昭和・平成期（1976～2009年）には、それ以前にみられなかった【程度副詞用法】が出現した。すなわち、「地味に」が形容詞を修飾し得るようになった。さらに、同年代期に、それ以前にはみられなかった【叙法副詞用法】も出現した。叙法副詞用法は、程度副詞用法の中で〈程度性〉の意味が後退し、〈表れ方が表立っていない〉ことを主眼とする用例が出現したことを発端に成立したとみられる。この用法は、当該の状況や事実に対する〈話者の捉え方〉（述べ方）を示すものである。その一部は、自己主張を和らげる控えめな表現としての機能をもつに至り、社会的に使用が広がったと考えられる。

4. 日英語における同様の变化傾向

以上、現代における「地味に」の変化とは、一言でいえば、様態副詞用法から、程度副詞用法および叙法副詞用法を派生させたものであった。このような変化の方向性は、「地味に」固有のものではなく、他の副詞にもみられる。

4. 1 日本語のケース

たとえば副詞「明らかに」について、永澤済（2008）では（66）（67）のような様態副詞用法から、（69）のような叙法性をもった文副詞（本稿の叙法副詞）を派生させたことを論じている。この変化は、明治中期ごろから、（68）のような〈様子のはっきりしたさまを述べる〉ことが同時に〈その事実の確かさを述べる〉ことと重なる用法を媒介とし、次第に〈事実として間違いない〉という話者の判断を述べる（69）のような叙法副詞用法が成立したものである。すなわち、様態副詞用法から叙法副詞用法を派生させた変化である。

（66）十五夜の月の、明かに隈なく静かに澄みておもしろし。

[宇津保物語／10C 後半]

（67）余輩未ダ其確証ヲ得ザルユヘ明ニコ、ニ論ズルコト能ハザレドモ
昔日ノ事ヲ思ヘバ今ノ世ノ中ニモ疑念ナキヲ得ズ。

[福澤諭吉『學問ノス、メ（三編）』／1873年]

（68）是れ繪畫的表示によりて、表はされる文學の特質とも云ふべき者にして、支那戯曲も、亦明かにかゝる傾向を有す

[『太陽』／1895年]

（69）大都会の金持ちを優遇するような今の政治は明らかに間違っている。
[asahi.com／2005年]

また、永澤（2010, 2011）では漢語副詞について、様態副詞用法から程度副詞用法、および叙法性をもつ文副詞用法が派生したことを論じてい

る。たとえば「俄然」について、(70)は現代の「突然」に近い意で、I〈にわかになりに〉状況が変わる様子を表すことに主眼がある様態副詞であったが、(71)のように、その変化の度合いが大きいことを強調するような文脈(「一轉」という語に表れている)で多用され、II〈状況の変わり方の度合いの大きさ〉の方に表現の力点が移っていった。その結果、現代は、(72)のみならず、(73)のように時間の流れをさほど感じさせない文脈でも、程度の大きさを強調する表現として使われ得る。さらに、規範的な用法とはいえないが(74)のように、形容詞を修飾する用法が一部にみられるようになり、程度副詞の性格を獲得した。すなわち、様態副詞が程度性を獲得することで程度副詞を派生させた変化である。他に、「断然」や「微妙に」にも類似の変化がみられる。

- (70) 此とき日暮れて雙方とも警戒の信號見分け兼しにや、互に間近くなるまで氣付ず、俄然衝突して電車は七八間ほど引摺られ、〔『海内彙報』(『太陽』)／1895年〕
- (71) 充分之を膺懲せるの後俄然方針を一轉して、敵國と結托するは、轉接の妙、實に世俗の耳目を驚破するに足れり。〔尾崎行雄「対清政策」(『太陽』)／1895年〕
- (72) 今後は自分から仕事をつかみ取りにいかないといけない。俄然やる気になっています [asahi.com／2008年]
- (73) 決しておもしろい噺ではないが、腕がよくて描写が的確だと俄然笑いを生む。 [asahi.com／2007年]
- (74) 辛さやハーブ類の香りも味も日本で口にするものより、俄然、濃い。 [毎日.jp／2008年]

以上、「明らかに」「俄然」「断然」「微妙に」等の副詞は、様態副詞から程度副詞や叙法副詞を派生させており、「地味に」と同様の变化傾向を示している。

4. 2 英語のケース

英語でも、様態副詞を起源として叙法性をもつ文副詞が派生したことが指摘されている (Swan 1988)。例えば、副詞 *hopefully* は Oxford English Dictionary (OED) によれば、次の (75) (76) のような "In a hopeful manner; with a feeling of hope" の意の様態副詞用法が古く1672年には成立しており、後から、(77) (78) のような叙法性をもつ "It is hoped (that); let us hope" の意の文副詞用法が成立した¹³。Swan (1988: 12) では、OED における (77) の例に言及し、文副詞用法への移行開始時期を1920年代あるいは1930年代と推定している。

- (75) He left all his female kindred..either matched with peers of the realm actually, or hopefully with earls' sons and heirs. [様態副詞用法] [OED より *View Life & Death Duke of Buckingham (Reliquiae Wottonianæ)* / 1672年]
- (76) He set to work hopefully. [様態副詞用法] [OED より / 1899年]
- (77) He would create an expert commission..to consist of ex-Presidents and a selected list of ex-Governors, hopefully not including Pa and Ma Ferguson. [文副詞用法] [OED より *N.Y. Times Bk. Rev.* 24 Jan. 11/4 / 1932年]
- (78) Prototype wooden rocking horses... Hopefully they will be available in the autumn at prices from £120. [文副詞用法] [OED より *Guardian* 13 Apr. 9/5 / 1971年]

同様に、Hanson (1987) および Traugott (1989) によれば、*possibly*, *probably*, *evidently*, *apparently*, *obviously* 等は、現在は話者の認識を表す文副詞 (speaker-oriented, epistemic (sentential) adverb) であるが、かつてはいずれも様態副詞であった。そのような事実から、Traugott (1989) は、ひとつの副詞において様態副詞用法と話者の認識を表す文副詞用法が共存するとき、様態副詞の方が古く文副詞の方が新しい用法であると指摘している。

たとえば、*probably* は次の(79) (80)のように、1400年代において”Plausibly, in a way that is likely to prove true”の意の様態副詞用法が確認できる。(81) (82)のような”Almost certainly; as far as one knows or can tell”の意の文副詞用法が確認されるのは1600年代になってからである。

- (79) More þan oon beyng..may þere not be..as resoun afore in þis book bi his natural list hap probabili provid. [様態副詞用法] [OED より R. PECKOCK *Reule of Crysten Religioun* (1927) 76 (MED) /1443年]
- (80) No Man shall mowe probably hereafter pretend Ignorance in this Partie by any maner colour. [様態副詞用法] [OED より in T. Rymer *Fædera* (1710) XI. 710 (MED) /1471年]
- (81) Three princes..came out of the East parts at this time vnto Bethleem of Iuda, which iourney they did the more willingly take, because probable their ancestors were also Iewes. [文副詞用法] [OED より R. CHAMBERS *Palestina* 121 /1600年]
- (82) Probably there were some wells within the verge of the Temple. [文副詞用法] [OED より T. FULLER *Pisgah-sight of Palestine* III. f. 394 /1650年]

以上、第3節で明らかにした「地味に」と同様の变化傾向が、日英語の複数の副詞にみられることが指摘できる。

5. 結論

副詞「地味に」の変化について、コーバスの用例を追った結果、次のことが明らかになった。

1. 『日本語歴史コーバス』(CHJ)で「地味に」の副詞用法の初出は明治期である。
2. 明治期から戦前にかけては専ら純粹な【様態副詞用法】であった。

3. 戦後、【様態副詞用法】の中に程度性をもつ用例が出現した。すなわち、様態副詞が〈様態〉を表すと同時に〈程度〉をも表す用例である。
4. 昭和・平成期（1976～2009年）に、3のタイプを媒介に、それ以前にみられなかった【程度副詞用法】が出現した。すなわち、「地味に」が形容詞を修飾し得るようになった。
5. 同じく昭和・平成期（1976～2009年）に、それ以前にはみられなかった【叙法副詞用法】も出現した。叙法副詞用法は、程度副詞用法の中で〈程度性〉の意味が後退し、〈表れ方が表立っていない〉ことを主眼とする用例が出現したことを発端に成立したとみられる。この用法は、当該の状況や事実に対する〈話者の捉え方〉（述べ方）を示すものである。
6. 【叙法副詞用法】の一部は、自己主張を和らげる控え目な表現としての機能をももつに至り、社会的に使用が広がったと考えられる。
7. 以上のような、【様態副詞用法】から【程度副詞用法】および【叙法副詞用法】への派生は、日英語の副詞「明らかに」「俄然」「断然」「微妙に」「*hopefully*」「*probably*」「*apparently*」等においても認められる傾向である。

冒頭に示した「地味に」の新用法の新しさとは、つまり従来は【様態副詞用法】であったのに対し、【程度副詞用法】【叙法副詞用法】へと拡張したところにある。【叙法副詞用法】が自己主張を和らげる控え目な表現としての機能をもったことが、使用範囲を拡大させたとみられる。それら新用法は、未だ規範的用法とはなっていないが、同様の変化が日英語の副詞にも起きており、一般性のある変化傾向である。

注

¹ この調査結果は2021年9月のNHKニュースでも取り上げられた。<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210925/k10013275571000.html>（2022年1月26日最終閲覧）

² 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の略称。現代日本語の書

き言葉を把握する目的で構築されたコーパス。書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルから1億430万語のデータを格納し、各ジャンルについて無作為にサンプルを抽出。

- 3 国立国語研究所『国語研日本語ウェブコーパス』の略称。ウェブ上の日本語テキストを利用し、稀言語現象の言語学的、心理学のおよび情報处理的視点からの究明の可能性を開くことを目的に、100億語規模を目標として構築された現代日本語コーパス。
- 4 程度副詞については、工藤浩（1983）の定義・分析に拠る。
- 5 叙法副詞については、工藤浩（1982, 2000）の定義・分析に拠る。
- 6 「地味に」の形をとる用例の中で、動詞「する」「なる」と共起する「久しい間の苦難の多かつた生活が一層彼女を賢實に、地味にしてゐた」〔CHJ 婦人倶楽部「破婚の深瘡を受けし手に新妻を迎へて」（橋田東声）／1925年〕、「召物が一年増に地味になつて行く」〔CHJ 女学世界「嫂の地位に居る者の心掛くべき事柄」（朽葉女）／1909年〕のような例は副詞用法に含めない。また、「地味にして」の形で接続助詞的「して」と共起する「恰も戦後の反動や整理の、地味にして困難なる時期」〔CHJ 太陽「財界に分布する政黨政派の勢力」（南北遊客）／1925年〕のような例も含めない。
- 7 仁田義雄（2002）で、「体を二つに割る」を結果副詞、「おまんじゅうをパツと割る」を様態副詞と区別するなど、両者の区別を重視する見方もある。ただ、仁田自身も両者の共通性を指摘しており、また「地味に」の場合、「様態副詞」に一括する方が変化の様相が明瞭となる。よって、本例「地味に…出来上がる」のように、「地味に」が行為や変化の結果を表す場合も「様態副詞」に含める。（8）の他にたとえば次のような例がある。
 - a. それは、苦勞と、心のはげしい生活と、鋭い成長とのために、四つ五つも、地味に、老けてしまつたが〔SHC 中央公論「新しい夜」／1933年〕
- 8 現行の国立国語研究所『日本語歴史コーパス明治・大正編』以降『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）までのコーパス空白期間を埋めるべく構築中のコーパス。新聞・雑誌・書籍（ベストセラー）を収録予定で、2021年11月現在、月刊誌『中央公論』『文芸春秋』1933-1989年刊行分が8年刻みでコーパス化されている（現在未公開）。
- 9 コーパス中に次のような「地味に」の用例があるが、これはいわゆる連用中止法（並列）で、副詞用法には含めない。

- a. 扮装に見る時、梅王丸や男之助の如く紅隈は陽性で派手に明るけれど、時平や將門の如く藍隈は陰性で地味に暗い。〔SHJ 中央公論「花を語る」／1941年〕
- b. それとは事かはず、ぐッと地味に少しでも理想的な状態を経験し得る機会と可能性を多くしようと云ふ〔SHJ 中央公論「リクリエーションとしての娯楽」／1941年〕

ただし工藤（1983）では、aの「地味に」が形容詞「暗い」と共起するような類について、副詞が形容詞を「なんらか限定している」との見方を示している。すなわち工藤は、「こんなに鮮やかに濃くて」〔帰郷〕、「さわやかに、寒かつた」〔蟹工船〕の類を、「中止用法に近い面もあるが、形容詞をなんらか限定している面も見のがせない。これらは、「花のように美しい／スッポンみたいにしつこい」といった比喩表現とともに、具象性がよく、したがって程度性をも内に含んではいろのだが、程度副詞とは言いにくい。形容詞を修飾する特殊な情態副詞（副詞形・副詞句）を認めなくてはならない」とみて、一種の情態副詞（本稿の様態副詞）に位置付けている。いずれの見方をとるにせよ、一般の（様態）副詞用法とは異なる特殊なタイプであることから、本稿の「様態副詞」には含めない。

- 10 鳴海伸一（2013）の論じる程度的意味の種類のうち、「①量的意味から程度的意味へ」に位置づけられるものかと思われる。
- 11 一般に「程度副詞」とは、単に程度を表す副詞のことではなく、形容詞を修飾し得る副詞のことである。たとえば、
- a. 高く飛んだ。
- b. 大きく息を吸った。
- c. 速く走った。

における「高く」「大きく」「速く」は、高さ・大きさ・速さといった数値化可能な事柄を述べ、語義に程度性をもつが、「程度副詞」ではない。それは、「非常に」や「とても」の意で「×高く美しい」「×大きく美しい」のように、形容詞を限定することができないからである。つまり、「高く」「大きく」「速く」等の語は、純粋に〈程度〉のみを表すことはできず、専ら動詞で表される内容の〈様態〉を規定する「様態副詞」である。その点で、「非常に」「とても」「大変（に）」のように、形容詞を修飾して〈程度〉を表すことのできる「程度副詞」とは性質が異なるものである。

工藤浩 (1983: 177) は、「程度副詞」の例として「非常に大きい」「大変静かだ」「かなりゆっくり歩く」「ずいぶん疲れた」「ずっと昔」を挙げ、これを「(相対的な) 状態性の意味をもつ語にかかって、その程度を限定する副詞」と規定している。そのうえで、「程度副詞が単なる意味分類ではない文法的な品詞類の一つとして認められているのは、主として動詞と組み合わさる情態副詞に対して、程度副詞が《種々の形容詞 (いわゆる形容動詞を含めて言う) と組み合わさるのを基本とする》という形式—文法的特徴をもつからだと思われる」と述べる(工藤のいう「情態副詞」は本稿でいう「様態副詞」と同じ)。ただし、工藤も述べているように、「程度副詞」が常に形容詞としか共起しないわけではない。「かなり食べた」のようにその他の品詞を修飾することもある。

- ¹² 工藤 (1982, 2000) は、山田孝雄 (1908) の立てた「陳述副詞」というカテゴリーを (a) ~ (c) の3類に分類し、(a) 叙法副詞 (推量、依頼といった、文の語り方=叙法性に関係するもの/例: 多分、どうぞ、なんと、明らかに、どうやら、どうせ、案外等)、(b) 評価副詞 (文の叙述内容に対する話し手の評価的な態度に関係するもの/例: あいにく、奇しくも、さいわい、感心に、親切にも、運よく、残念ながら、早くも、悲しくも、うれしいことに、驚いたことに等)、(c) とりたて副詞 (限定、見積もり方といった、文の特定の部分の「とりたて」——表現されていない他の同類の物事との範列 (範例) 的 (paradigmatic) な関係の中で問題の語句に対してどのような取り上げ方をするかということ——) に関係するもの/例: ただ (君だけが頼りだ)、少なくとも、単に、もっぱら、ひとえに、まさに、せめて、たかが、せいぜい等) としている。

さらに、(a) 叙法副詞は、[A 行為的な叙法: どうぞ、ぜひ、ひたすら、わざと等] [B 認識的な叙法: なんと、明らかに、きっと、断じて、多分、たしか、どうやら等] [C 条件的な叙法: もし、いったん、どうせ、どんなに、もちろん、せっかく等] [D 下位叙法: なるほど、確かに、実は、案外、意外にも、かえって等] の4類に下位分類されている。以下の本文に示す「地味に」の新用法は、当該の状況や事実を話者がどのように述べるか (文の語り方=叙法性) を示し、その中で〈話者の捉え方〉(認識) に関するものであることから、(a) 「叙法副詞」の [B 認識的な叙法] にあたるとみることができる。

なお、「地味 (に)」の本来の意味には話者の評価 (価値判断) を含むことから、一見すると (b) 評価副詞と紛れるが、工藤が説くように、「地図を書いて、親切に道順を教えてくれた」「太郎は上手に歌を歌った」の類が示す評価性とは、

叙述内容を詳しくするもの（すなわち「様態副詞」）としての評価性であり、これ自体は「評価副詞」とはいわない。工藤のいう「評価副詞」とは、文の叙述内容に対する〈話者の評価〉（価値判断）を示すものであり、「親切にも、地図を書いて道順を教えてくれた」「幸い晴れた」「あいにく雨が降ってきた」の類を指す。

- ¹³ 後から成立した *hopefully* の叙述副詞（文副詞）用法は OED では “Avoided by many writers”、Oxford Advanced Learner's Dictionary では “Although this is the most common use of *hopefully*, it is a fairly new use and some people think it is not correct.” とされ、規範性を問題にする話者には避けられる用法である。

引用文献

- 工藤 浩 (1982) 「叙述副詞の意味と機能——その記述方法をもとめて——」『国立国語研究所研究報告集』3, pp. 45-92.
- 工藤 浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」渡辺実 (編) 『副用語の研究』, pp.176-198, 明治書院.
- 工藤 浩 (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤 浩 『日本語の文法3 モダリティ』, pp.163-234, 岩波書店.
- 永澤 済 (2008) 「様態副詞から文副詞へ——日本語の副詞「明らかに」の歴史的变化を追って」『認知言語学論考』7, pp.97-115.
- 永澤 済 (2010) 『近現代期日本語における漢語の変化』, 東京大学博士学位論文.
- 永澤 済 (2011) 「文法的機能からみた漢語 (特集「いま、漢字は」, 漢字・漢語の諸相)」『国文学解釈と鑑賞』76-1, pp.153-162.
- 鳴海伸一 (2013) 「副詞における程度的意味発生の過程の類型」『国立国語研究所論集』6, pp.93-110.
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相 (新日本語文法選書)』くろしお出版.
- Hanson, Kristin (1987) On subjectivity and the history of epistemic expressions in English. *Chicago Linguistic Society* 23: 132-47.
- Swan, Toril (1988) The Development of Sentence Adverbs in English. *Studia Linguistica* 42(1): 1-17.
- Traugott, Elizabeth Closs (1989) On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change. *Language* 65 (1): 31-55.

コーパス

BCCWJ：国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

CHJ：国立国語研究所『日本語歴史コーパス』

NWJC：国立国語研究所『国語研日本語ウェブコーパス』

SHC：国立国語研究所『昭和・平成書き言葉コーパス』

